

# 1. 母親の子育てつきあい

## 1. 母語と育った文化背景

アメリカやオーストラリアなど歴史的にも長い間、多文化・多民族が共生している国の保育現場では、子どもが、**Non-English Speaking Background** であるか否かの対応をしている。

英語を第1言語としていない、または、文化背景が英語圏ではない生まれかどうかが、まず、最初に問われるのは、それだけ母語と育った文化背景が保育や育児生活の中で大きな意味をもつからであろう。

言語は、保護者を含めた家族全体の問題である。前章では、滞在年数が短く、日本語が十分ではない保護者は、日本での暮らしに慣れておらず、子育て生活や園の先生とのコミュニケーションにおいても、困難感を抱えていることが明らかにされた。

## 2. 日本語能力、滞在年数と

### 子育てつきあい積極的傾向との関係

その一方では、日本で生まれ育ち、言葉には不自由をしていない日本人の母親であっても、母親同士の子育てつきあいに消極的で、負担感を抱えている人は少なくない。このことは、子育てつきあいには国籍を問わず、個人のパーソナリティ、子育て意識や行動特性が大きく関与していることを示唆している。

そこで、「他の親達が話しているところに気軽に参加できるほうだ」、「親子での友だちつきあいを負担に感じる」、「知らない人でもすぐに親しくなれる」など、子育てつきあいへの意識や親和性、行動傾向に関する設問6項目を4段階評定でたずねた。

それらの項目得点を加算した結果を、『**子育てつきあい積極的・親和性傾向**』と名づけ、その合計点が高いグループと低いグループに同じ比率で分けた。

「子育てつきあい積極的傾向（以下、このように略す）」と「日本語能力」、「滞在年数」の

因果関係をみた。その結果、「日本語能力が高く、滞在年数が長いと子育てつきあいが積極的で親和性傾向が高くなる」という因果関係よりは、「子育てつきあいに積極的傾向が高い母親は、日本語能力が高くなる」という因果関係の数値のほうが高く、上記の示唆を裏づけていた。

## 3. 園に慣れるのに役立ったこと（図5-1）

「子育てつきあい積極的傾向」の高い母親達と低い母親達のそれぞれが、園生活に慣れるのには、どのようなことが役に立ったかを比較した。その結果では、積極的な傾向が高い母親達は、「先生が私に親密に連絡をとってくれた」、「日本人の保護者や子どもが話かけてくれた」と周りの人達の働きかけを評価していたが、積極的傾向が低い（消極的傾向の）母親達は、「自分が努力した」と受けとめているほうが多かった。

しかし、消極的傾向な母親は、「先生が母語で言葉かけをしてくれた」ことが、役に立ったと有意に感じていた。このことは、園の先生のほうからの働きかけのし方や配慮がとくに必要で、期待されていることを示していた。

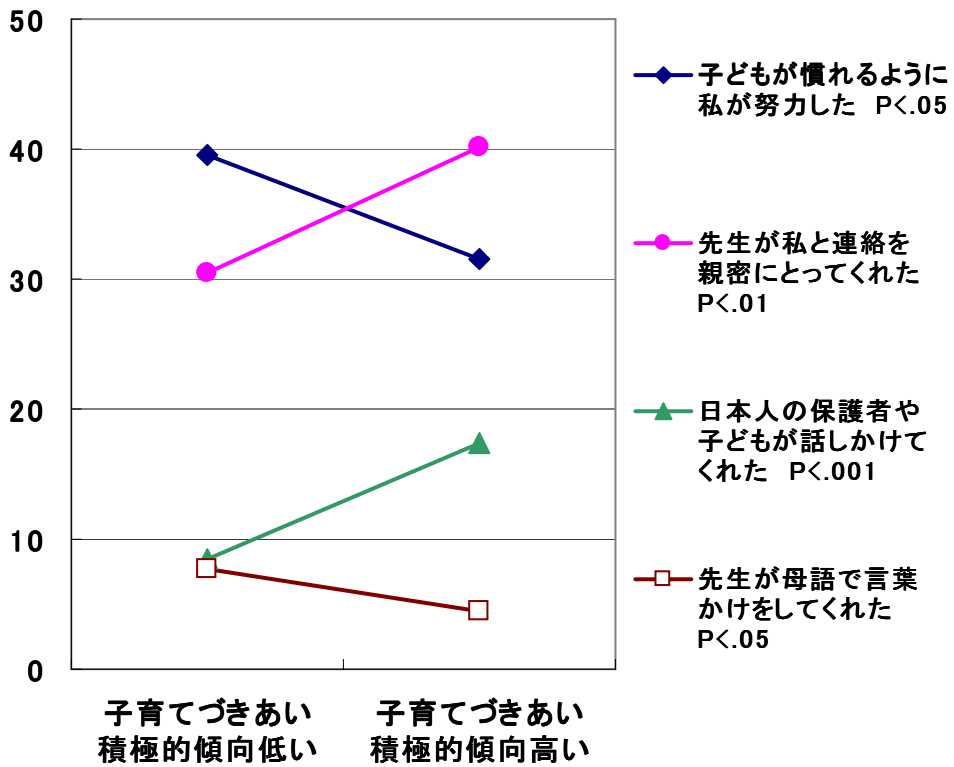
## 4. 園と子育て生活の受けとめ方（図5-2）

### 先生との関わり（図5-3）

現在、子どもを園に通わせていて、良かったと思うことや気がかり、先生とのコミュニケーションなどを比較した。

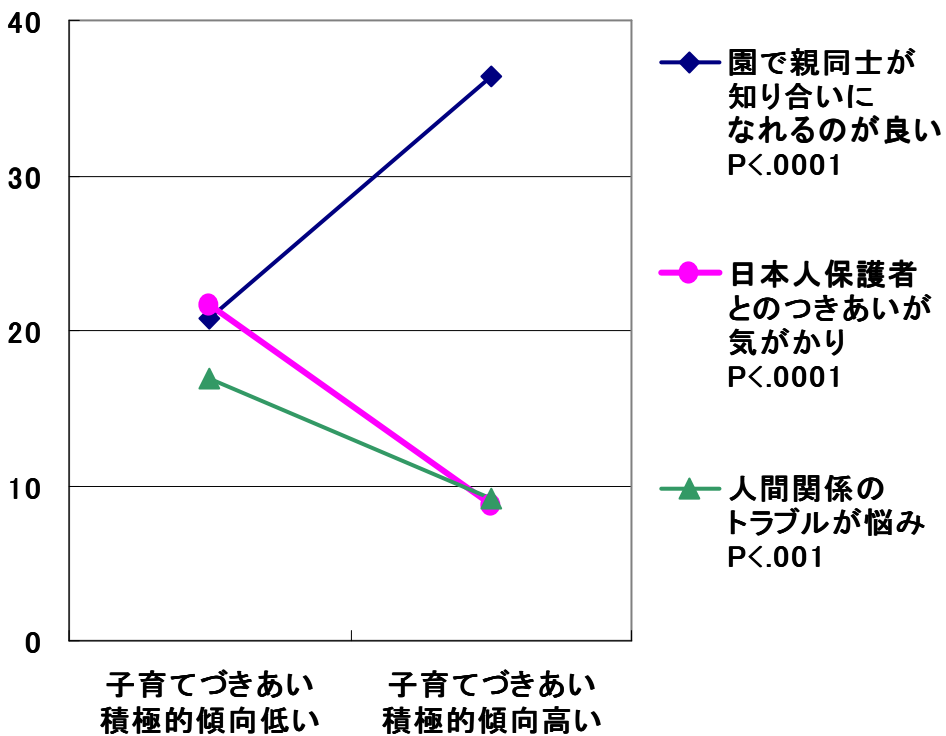
積極的傾向が高い母親は、「園で親同士が知り合いになれるのが良い」と感じている割合が極めて高く、自分から先生へと努めて話かけ、行事や保護者会にも積極的に参加するなど意欲的である。しかし、積極的傾向が低い母親は、その反対に、日本人保護者とのつき合いや参加行事が多いのを負担に感じて、人間関係のトラブルも抱えて悩んでいる深刻な状況下にあった。

Fig.5-1 園生活に慣れるのに役にたったこと  
(パーセント)

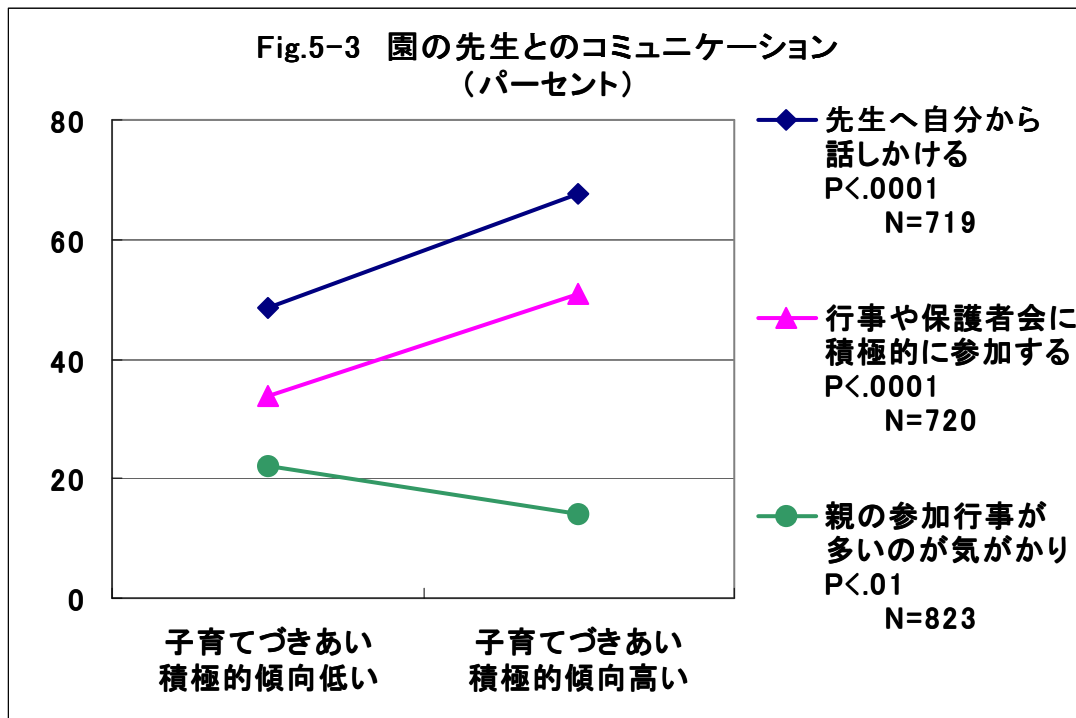


N=823

Fig.5-2 園生活や子育て生活の受けとめ方  
(パーセント)



N=823



## 5. 友だちとの関わりと

### 園での慣れ (図 5-4, 図 5-5)

子どもが友だちと仲良く遊べることは親にとっても大きな関心事で、前章の「子どもの交友関係」では、子どもの友だちとの関わりを思いやる保護者の心情が記述内容から紹介されていた。

また、本調査に先立って行われた日本人の母親を対象とした予備的な調査においても、子育ての気がかりとして、「友だちと仲良く遊ぶこと」が2位にあげられていた (P110)。

近年の少子化で、まわりには同年齢の子どもが少なく、限られた遊び仲間の親子同士がいつも一緒に行動している。その結果、子ども同士のトラブルが、そのまま親同士の問題に発展するような子育て環境もある。

そこで、母親の「子育てづきあい積極的傾向」と子どもの友だちとの関わりや園での慣れをみると、子育てづきあいを積極的に関わっている母親の子どもは、園にもよく慣れて、日本人とも同じ国の子どもともよく遊んでいるという結果であった。

同様に、積極的傾向が高い母親は、「いじめ」や「子どもが仲良く遊べるか」の心配も少ないことが明らかになった。

## 6. 子ども同士で遊べない心配

子どもの友だち関係についての自由記述には、共通した悩みがあげられていた。

日本語が十分ではないので友だちの遊びの輪に入れず仲間はずれになることを心配し、つぎは、外国人だからと差別されていじめられている、また、いじめられるのではないかと不安が主流を占めていた。親の多くは、子どもの性格が内向的で、友人や園生活になじむには時間がかかると受けとめていた。

しかし、「親が行事に参加しないと、子どもが友だちの間で孤立するので参加するが、両親の負担になる」と、自分自身が忙しく働く生活の中で、日本の園や地域での親子ぐるみの子育てづきあいや家庭との連携を負担に感じている意見が目立った。それと同時に、「私の友だちが少ないので、子どもも友だちができないのではと心配」、「日本の親達は相手に迷惑をかけないが、あまりにも人間味がなく、近よるのがむずかしい」と感じている親もいた。子育てづきあいは、親の個性や行動特性に大きく影響されているものの、記述内容からは、多文化な背景をもつ親子の対人関係を考える上では、とくに、精神保健的援助や配慮がこれからの重要課題であると思われた。

図5-4 友達との関わりと園での慣れ  
(平均値)

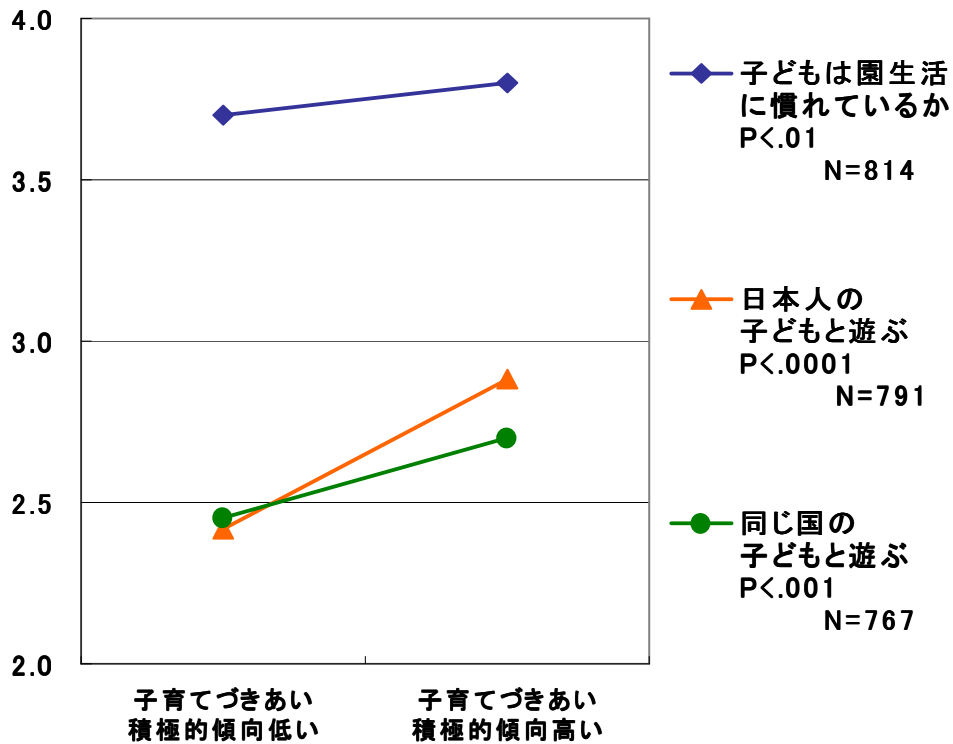
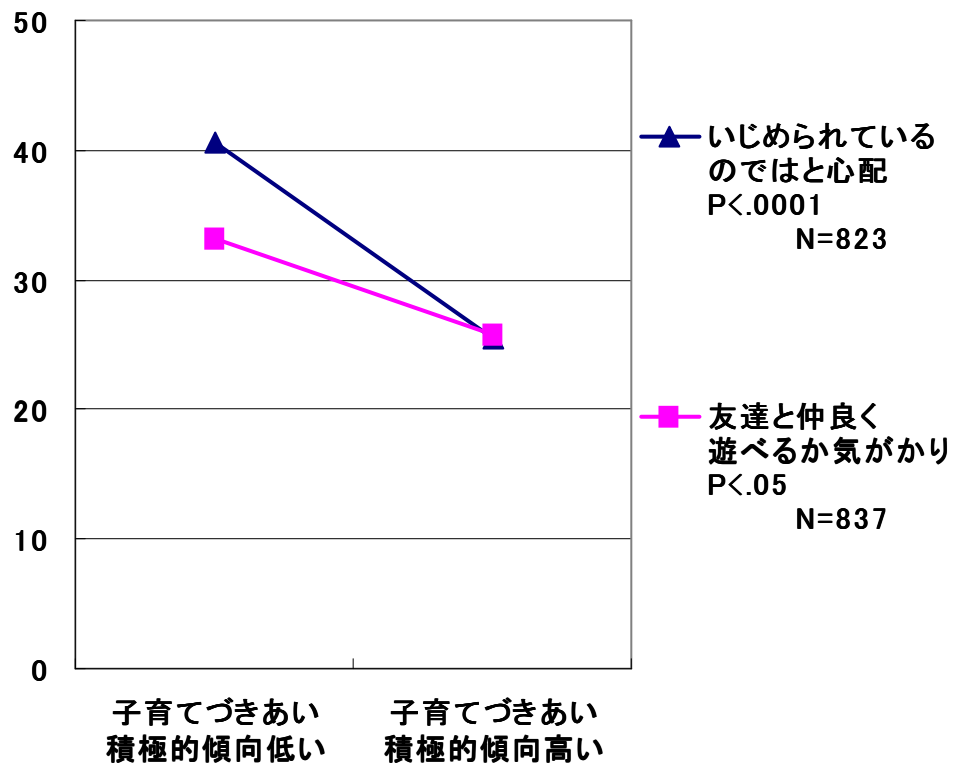


Fig.5-5 子どもの友だち関係  
(パーセント)



## 2. 保護者の子育て生活の受けとめ方

### 1. 子育て生活の受けとめ方(図5-6)

日本での子育て生活の受けとめ方や子どもに対して、どのように感じているのかを18項目にわたって、「とてもそう思う」から「ぜんぜんそう思わない」までの4段階評定でたずねた。「とても+ややそう思う」を加算した結果が図5-6である。

「子どもを持つことで自分自身が成長した」と思っている親は81.4%おり、最も多かった。ついで、「子どもには自分以上の学歴をつけたい」69.8%、「子どもが悪いと自分の責任のように思える」66.4%、「親としての自分に満足している」57.5%の順であった。上位4位までに、子育てを肯定的に自己評価する内容が2つあげられていた。

上位10位までの全体を通しては、子を持つ親としての自己肯定感はあるが、それと同時に、子どもへの学歴期待が高く、教育への責任感と不安感を強く感じていることが表れていた。

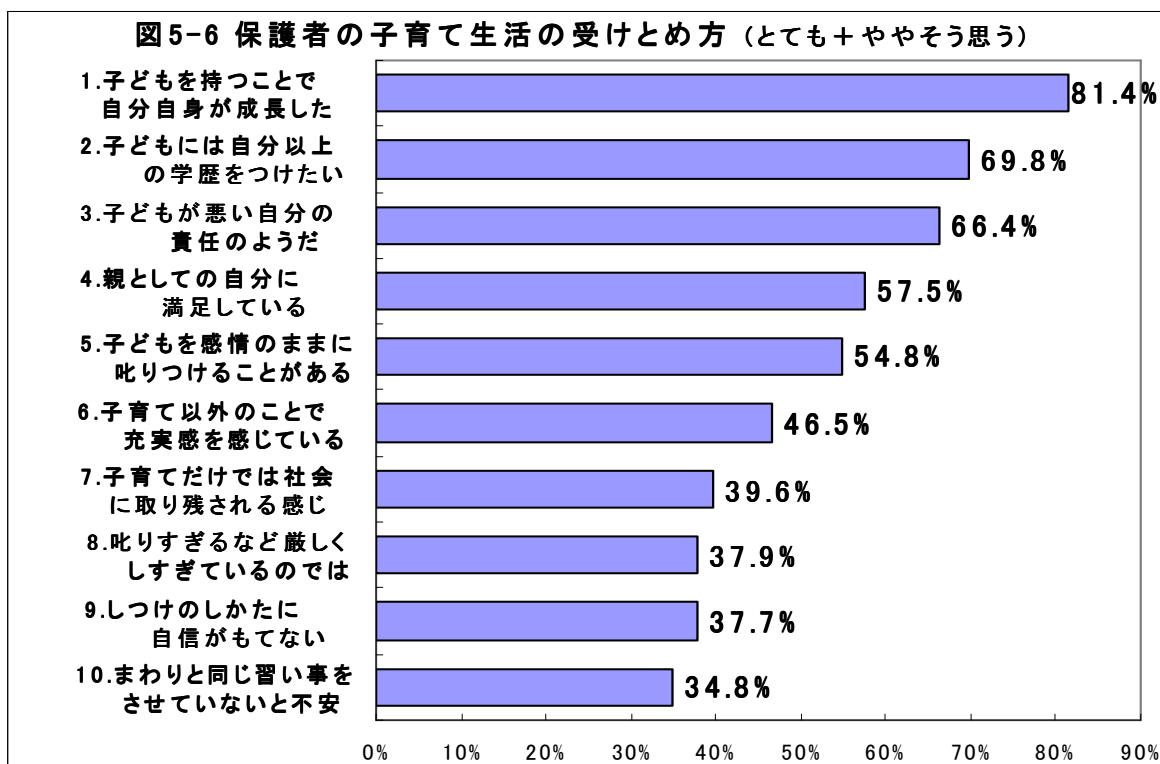
自由記述欄に、母国と比較して日本の教育システムの改善や集団保育における就学前教育の強化を要望する意見が多く書かれていた点とも呼応する結果であった。

### 2. 国籍・地域別の上位10位(表5-1、5-2)

「子どもを持つことで自分自身が成長」の項目を国別でみると、中国や韓国・日本・ブラジル・アメリカなどが1位にあげていたが、タイ・ペルーは2位、ベトナムは4位と国によって異なっていた。

全体で2位の「子どもへの学歴期待」を、タイ・ベトナム・ペルーの保護者は90%前後が1位にあげていた。また、「子どもが悪いと自分の責任」は、台湾・中国・朝鮮は80%以上が2位にあげていた。

国別の人数に開きがあるものの、各国の1位から5位までを比較すると、ブラジル・ペルー・アメリカ・フィリピンなどに大きな差異がみられた。



N=2002

表5-1 国籍・地域別の子育て生活の受けとめ方(上位10位)

全体の順位 N=1,836(人数)	中国 549人	台湾 64人	韓国 314人	朝鮮 40人	日本 287人	フィリピン 189人
1.子どもには自分以上の 学歴をつけたい	①89.8	①93.8	①89.8	①97.5	①92.0	②67.7
2.子どもが悪いと自分の 責任のようだ	③77.4	③65.6	③65.9	③55.0	③71.1	①77.2
3.子どもを感情のままに 叱りつけることがある	②83.2	②87.5	②79.6	②85.0	②74.2	④47.1
4.子育て以外のことで 充実感がない	⑦55.0	⑦59.4	⑥51.6	⑤40.0	⑦53.3	①77.2
5.子育てだけでは 社会に取り残される感じ	④65.4	④64.1	④57.3	⑤40.0	④66.9	③60.8
6. 子どものしつけのしかたに 自信がもてない	⑥60.3	⑧56.3	⑤56.1	④52.5	⑥54.0	⑩19.0
7. 叱りすぎるなどきびしすぎる のではないかと思うことがあ	⑤64.8	⑨53.1	⑨37.9	⑩22.5	⑤54.4	⑮ 5.8
8. まわりがしている習い事を 自分の子がしていないと不安	⑩45.9	⑥60.9	⑦43.9	⑨32.5	⑨45.3	⑧28.0
9. 親としての自分に 満足していない	⑨48.1	⑤62.5	⑧40.1	⑥35.0	⑧48.4	⑬12.2
10. とても心配性で、 くよくよ気に病むほうだ	⑧51.9	⑬28.1	⑪36.0	⑫12.5	⑩38.7	⑨23.8

表5-2 国籍・地域別の子育て生活の受けとめ方(上位10位)

全体の順位 N=1,836(人数)	ブラジル 65人	タイ 50人	ベトナム 36人	ペルー 33人	アメリカ 29人	その他 180人
1.子どもには自分以上の 学歴をつけたい	①96.9	②82.0	④63.9	②78.8	①89.7	①81.7
2.子どもが悪いと自分の 責任のようだ	②87.7	①90.0	①88.9	①84.8	②69.0	②73.3
3.子どもを感情のままに 叱りつけることがある	⑧44.6	④72.0	③72.2	⑤39.4	⑤31.0	④49.4
4.子育て以外のことで 充実感がない	③86.2	④72.0	②80.6	③75.8	①89.7	③72.2
5.子育てだけでは 社会に取り残される感じ	⑬24.6	③78.0	⑥47.2	⑤39.4	④37.9	⑥36.7
6. 子どものしつけのしかたに 自信がもてない	⑤66.2	⑩28.0	⑫16.7	⑥27.3	③48.3	⑤41.1
7. 叱りすぎるなどきびしすぎる のではないかと思うことがあ	⑪32.3	⑪22.0	⑬13.9	⑩12.1	⑥20.7	⑩22.8
8. まわりがしている習い事を 自分の子がしていないと不安	⑥50.8	⑦40.0	⑧36.1	⑦24.2	⑨10.3	⑨24.4
9. 親としての自分に 満足していない	④67.7	⑨32.0	⑩33.3	⑦24.2	⑦17.2	⑦26.1
10. とても心配性で、 くよくよ気に病むほうだ	⑫27.7	⑥44.0	⑤58.3	⑧21.2	⑩ 6.9	⑪17.2

(注) 国籍・地域の詳細についてはP2を参照

% (人数)

## 3. 母親の育児不安

### 1. 子どもへの期待と不安感

子育て意識の中には、母親としての満足感と同時に、子どもの将来への期待や不安が混在している。

本調査結果では、「子どもには自分以上の学歴」を期待する項目と、「まわりと同じ習い事をしていないと不安」・「習い事や練習などを子どもに強要しているのでは」などの不安項目が相互に強く関連していた。

そこで、「子育て以外の充実感」、「親として成長」、「親として満足」など肯定的な項目を、「あまり+ぜんぜんそう思わない」と否定的に受けとめた母親の不安感に焦点をあてて、他の不安項目と方向性を合わせて得点化し、母親の育児不安を検討した。

### 2. 子育てづきあいと育児不安 (図5-7)

子育ての受けとめ方の各項目を母親達の育児不安の視点から見ると、5つに分類された。まず、子どもを思わず叩く、感情のままに叱りつける、叱りすぎるといふ子どもに対する『ネガティブな関わり』があげられる。

つぎに、子どもへの学歴期待や習い事、練習を強要しているのではないかなどの『教育不安感』がある。また、心配性でくよくよ気に病む、しつけのし方に自信がもてないなどの『育児劣等感』、さらに、母としての自分に満足していない、子育てだけでは社会に取り残されていくなどの『現状不満感』である。

なお、不安や恐怖感におそわれることがある、子どもを育てることの負担感やわずらわしくてイライラするなどの『子育て焦燥感』が高い母親には、まわりからの配慮が必要とされている。

多くの母親にとって、自分自身の生育環境と異なる日本での子育ては、戸惑いや困難感が高いのではないかと思われるが、とくに、その中でも、『子育てづきあい積極的・親和性傾向』が低い母親は高い母親に比べて、育児

不安を構成するすべての不安感が有意に高いという結果であった。

育児不安感も母親自身の性格特性が大きく関係することが明らかになったが、園や地域での親子同士のつきあいを負担に感じて消極的な母親は、国籍を問わず多い現状である。親も保育者も忙しい日々を送る園の現場には、不安感の高い母親に個別対応できるような外部からの社会的援助システムが必要とされていることも示唆された。

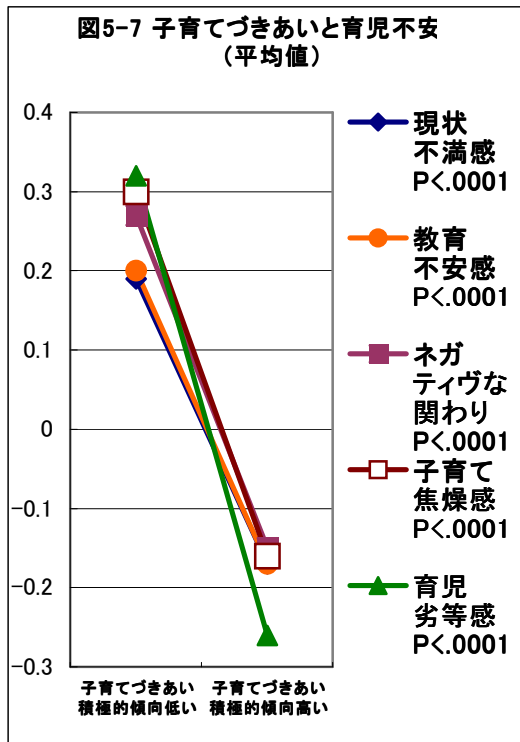
### 3. 滞在年数と教育不安感 (図5-8)

滞在年数別に「学歴期待」や「まわりと同じ習い事をさせないと不安」、「習い事や練習など、子どもがいやがるのにさせている」などの『教育不安感』の平均値を比較した。その結果では、滞在年数が長くなるにしたがって、教育不安感はおおむね下降していたが、3年から10年未満では、「学歴期待」や「まわりと同じ習い事」が最も多い数値であった。国籍別に3年～10年未満の滞在者の比率をみると、ブラジル、タイ、ペルー、ベトナムなどが有意に多く、表5-2でも、『教育不安感』項目の数値が高いこととも関連していると思われる。

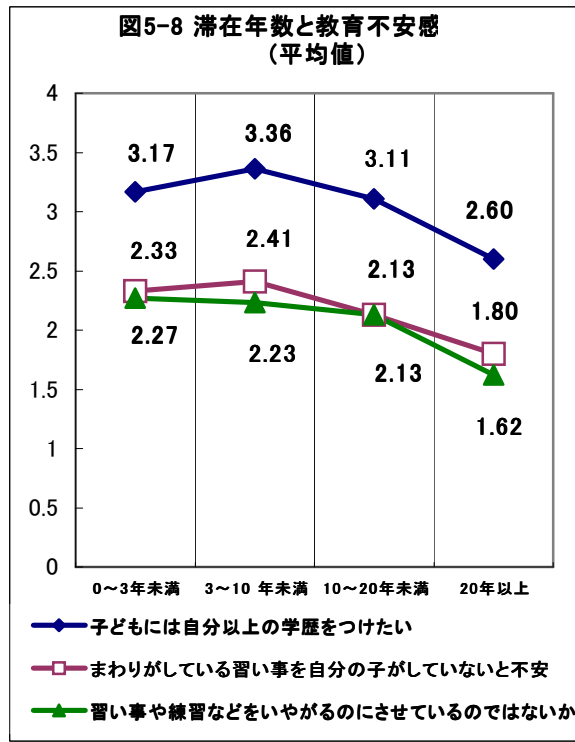
### 4. 就業状況と育児不安 (図5-9)

しつけや教育に関する責任と不安感や現状不満感、そして、叱る育児への罪障感などが上位にあげられていた。就業状況別にみると、「学歴期待」には差がない。全体的には、専業主婦が、どの内容に関しても不安感が高いことが表れていた。パートタイマーは、「子どもを感情のままに叱りつける」が、他の母親に比べて有意に多かった。

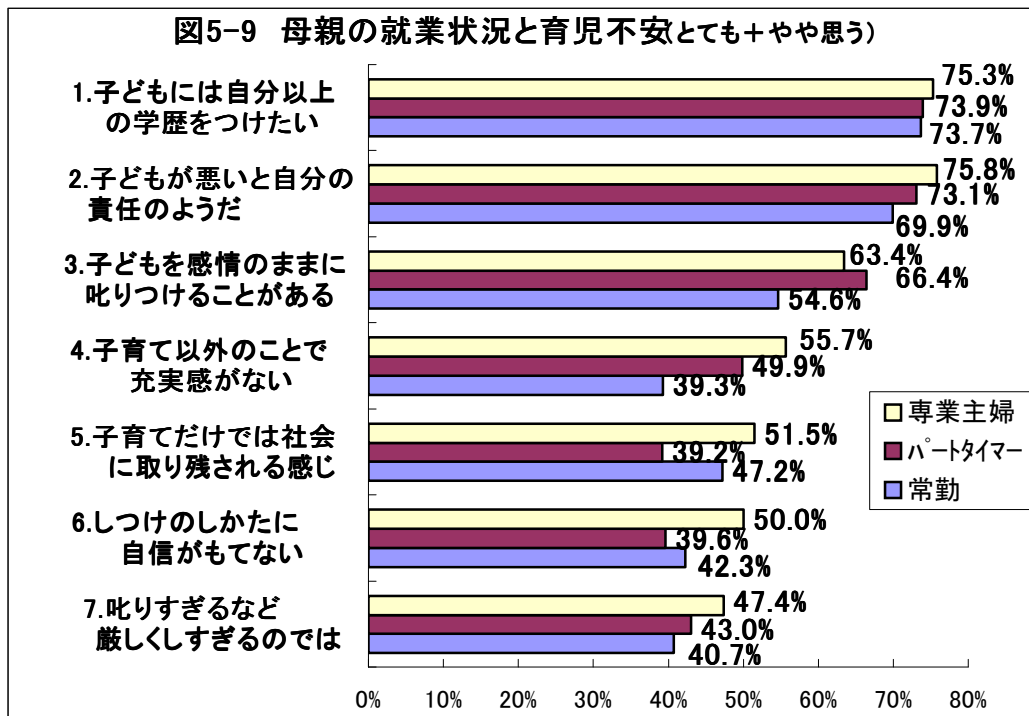
また、働く母親の自由記述には、「仕事と育児や家事で毎日が疲れ果てて余裕がなく、子どもにも、つい感情的になってしまい反省している」という内容がとくに目立った。



N=739



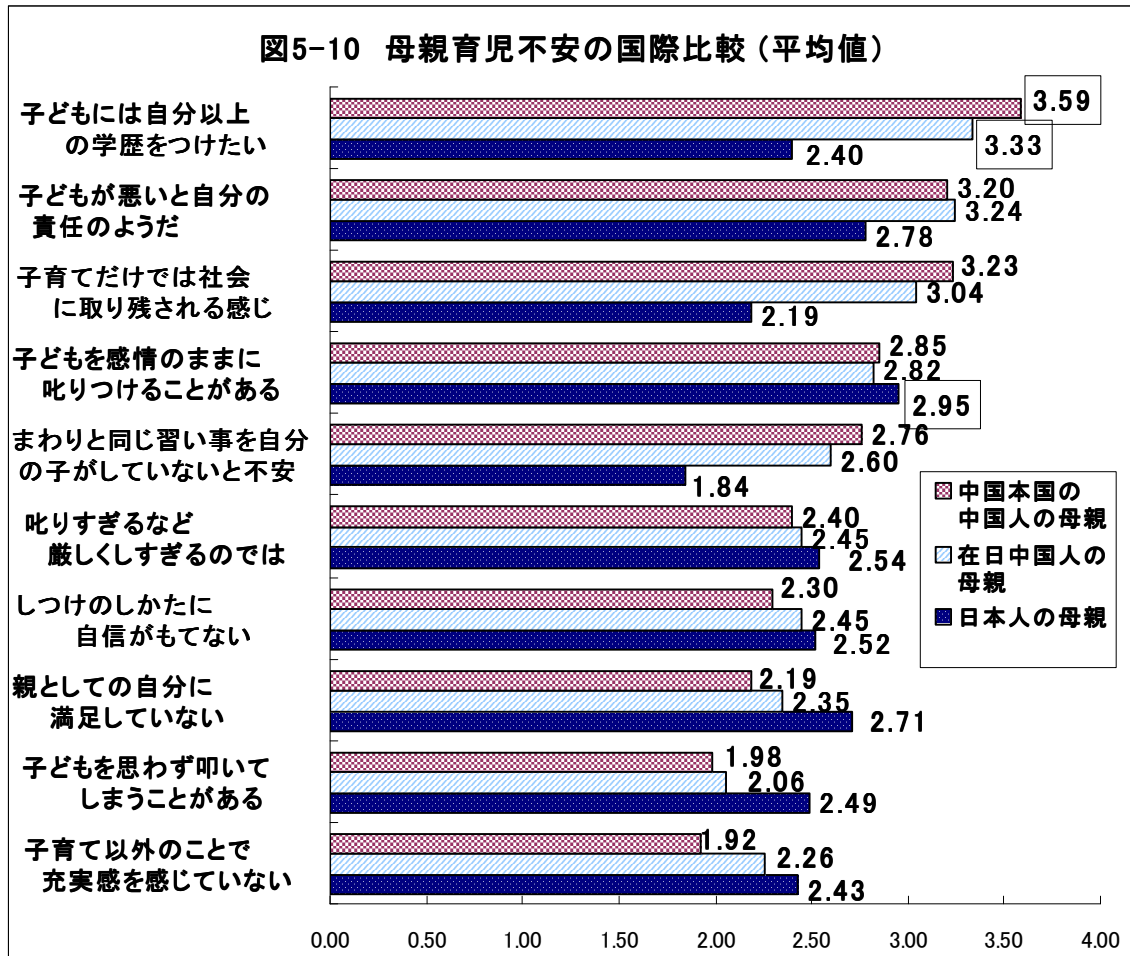
N=1379



N=1457



## Column：母親の育児不安の国際比較



本調査の保護者の中で、最も人数が多かったのは中国人である。

そこで、中国本国に住む中国人の母親<sup>注1</sup>、日本に住む中国人の母親<sup>注2</sup>、そして、日本人の母親<sup>注3</sup>の育児不安を同じ質問項目で比較した結果が図5-10である。

図の数値は各項目を、「とても思う」4点から、「ぜんぜん思わない」1点までの4段階で評定した結果の平均値である。中国に住む中国人母親は、「子どもへの学歴期待」が第1位の3.59という高得点で、2位は、「子どもが悪いと自分の責任」であった。それぞれの1位の数値を四角で囲んであるが、日本に住む中国人の母親も1位・2位ともに同様の項目であった。

現在、幼児を抱える中国の30代の母親達は、学生時代には文化大革命のために、通常の教育が受けられなかった自分自身の体験がある。加えて、市場開放経済後、人的資源である一人っ子に対する祖父母親戚からの教育期待が高まっている社会背景を考慮したい。

それに比べて、日本の母親達の第1位は「子どもを感情のままに叱る」で、「子どもを思わず叩く」が4位、「叱りすぎるなど厳しすぎる」が5位にあげられていた。在日中国人の母親は、上位5位までは、中国本国の母親に追従した得点を示し、また、日本人の母親が高得点の項目に対してはそれに準ずる数値となり、両国の中間的位置を示していた。

注1 山岡 2000年「中国での育児不安と育児情報に関する子育て調査」 N=455

注2 本調査の対象者から中国籍もしくは、中国語の調査票を用いた日本籍の母親を一部含む N=565

注3 山岡 2000年「育児不安と育児情報に関する子育て調査」 調査概要はp104を参照、N=1704